

## コンブ・ノリ・ワカメ養殖漁業の皆さんへ

# 四十四年度海藻類養殖事業の反省

増殖部 川島 昭 二

道東地方の四十四年度海藻類養殖事業も十二月でほとんど終ろうとしておりますが、全体をふりかえつて見て各事業ともに大きな成果が目につくと同時にこれからの発展の基礎となる上の大きな転換期にさしかかつていることも切実に感じとられた一年間でした。

以下に各種類ごとこれららの点を総まとめにして解説し、新しい年に向つての皆さんへの参考にしたいと思ひます。またこの問題は単に漁業者の皆さんだけでなく、漁協、普及員、水試さらには行政を担当する者がすべて真剣に考へ解決すべき事柄ではなからうかと思ひます。

### 一、コンブ養殖

羅臼漁協におけるコンブ養殖

は、水試と共同で本格的な試験に入つて二年以上を経過しました。この間、構改事業による採苗場も完成し、種苗の供給体制も一応確立しました。また養成試験の結果、昨年夏には成コンブの収量調査も行なわれました。またすでに本誌十五号で述べた種苗の越冬保存と、その種苗を用いた養殖の考へ方についても、現在順調な成果をあげており、この夏には成コンブとして収穫の見通しが得られております。これらの具体的な成果については改めて報告する予定ですが、養殖技術や実際の管理の上で、反省すべき点とし次のような事柄が考へられます。

(1) 種苗生産について 私たちは八月から十二月までを採苗期間と考へて試験を行なつてきましたが、実際に良好な採苗が可能な時期は十一月に限定され、少くとも十二月上旬までに終えるのが望ましいように思われます。将来養殖台数が増加し、また現在試験中の種苗の越冬保存による養殖が確立して、全面的

にこの方法による事業が行なわれる場合必要なだけの種苗を大量にストックできる、さらに合理的な施設が必要になります。

(2) 実入り促進や品質向上を計るための適正な着生本数の決定と、これを実現するための間引きの方法を確立することが大切です。養殖コンブは見かけは立派でも、歩留りが悪い、傷物や変形が多い、末枯れが早いなどのいろいろな批判は残念ながら否定できない点が多くなり多いように思われます。しかしこれらの原因の多くは密植に深い関係があることが判つておりますので、管理方法の改良を行なえば解消はそれ程難しくはないでしょう。

(3) 養殖事業の最も大きな利点の一つは、このように常に、目で見ても、その時々相手の様子を判断し、対策を講ずることができる点にあります。

コンブ養殖はまだ始まつたばかりの新しい技術ですが、天然コンブにたより過ぎてきた私たちに、どうもコンブに対して、放つておいても自然に育つと言ひ無責任な気持ちが残つていようです。しかし羅臼でも手をかけた筏と、放りつばなしの筏ではコンブの着きや生育度がまるで違ふことを私たちは実際に経験してきました。試験場や普及所は万端ではありません。試験の結果を生かして、実際の

事業として発展させるのは、漁業者の皆さんの力以外にはないのです。道東のコンブ養殖の中心地は羅臼を以て他にないことを改めて認識することが大切です。

## 二、ノリ養殖

厚岸のノリ養殖事業は飛躍的に発展し、一時に開花したと言ひ感があります。四十三年の春ノリは十六万枚、四〇〇万円、秋ノリは十二月月上旬現在です約百十八万枚、二五五六



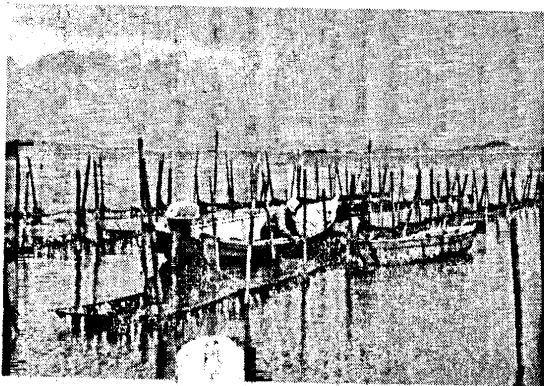
コンブ養殖（羅臼）

万円が生産され、なほ生産が続いていきますので、最終的には春、秋合せると二百萬枚、三千五百萬円にせまる生産があるものと期待できそうです。四十三年度までの生産はせいぜい十五―二十五萬枚前後でしたから、その生産の伸びはまさに一きよに一〇倍に達するものと思われまます。この直接的な原因は養殖漁家・反数の急増で、従来は五―六戸で、五百―六百反ぐらゐの規模であつたものが、春ノリは二〇戸、五三七反に、秋ノリに至つてはその数九〇戸、反数は四〇〇〇反とも五〇〇〇反とも言われ、正確な数字が確認されていない状態です。これは組合で実施した人工採苗二八〇〇反以外に、天然採苗とスポ式採苗が意外に多く各人の手で行なわれたためです。また昨年から注目を集めた冷蔵網による試験も春、秋ともかなりの成果をあげて自場生産による企業としての見通しも強まり、秋ノリ網のうち、相当多数のものが、この春に使用する冷蔵網として保管されたものと考えられます。

しかし厚岸のノリ養殖にもいろいろと問題が出てゐることを感じないわけにはいきません。その中から特に大切なことを次にあげてみたいと思ひます。

(1) 漁場環境から見て、私は道内で厚岸湖ほど

ノリ養殖漁場としてすぐれた所はないと信じています。特に秋ノリについては余程のことがない限り、教科書通りの管理さえ実行すれば、一反から五百枚や千枚のノリを採ることはいずれ程困難ではないと言ひ感じさせ受けます。このことは四十三年秋に道南の有珠で大凶作があつた時に、厚岸でも同じような海況の異状傾向が明らか認められたのに、生産は二五萬枚と三六年以来最高の収量をあげた



ノリ養殖（厚岸湖）

ことでも判ります。しかしこのことが、厚岸にとつて現実にはマイナスともなつてゐるようです。ノリ漁場を廻つてみますとおそらく教科書以下の管理をした人は思わぬ失敗をしてゐるようが見えます。その一例として、秋ノリは特にアオを付けた網が目立つていました。九月はアオに最も注意する季節で、ノリの発芽管理期とも重なります。このことは厚岸のノリ養殖の常識とも言えることで、アオ殺しは、まだ芽の小さい時に手まめに行なえば容易ですが、十月も中を過ぎてアオが大きくなつてからは、完全な駆除はできません。アオ殺しはすでに漁業者の管理によつて行なえるものとなつていますが、アオ混りが多くても、高値にささえられて安易な気持を持つていなかつたでしょう。アオのほかに大きな問題として病害対策が急がなければなりません。これは水試のこれからの大きな課題としてとりあげる必要があるでしょう。

厚岸ノリの真価は消費者の目にふれ、口に入つて始めて問われるのです。一度下げた評判を回復することは容易ではありません。厚岸ノリなら安心だと言う声がかれるように養殖の基本を十分身につけて、製品の向上に努めるよう前進を重ねてほしいものです。

❷ 不思議なことノリの指導者や漁民には変

人が多いようです。これは養殖技術が個人プレーや名人芸として発展した面が多く、一人が自分の考えを主張したがるからです。厚岸でもこれからは人の和が大切だと思ひます。管理技術は他人より一歩でも先に出ると言ひ積極性が必要で、その競走心が厚岸のノリ養殖発展の最大のカギでしょう。しかしそれはあくまでも漁場での競走に限りたゐるものです。そして陸に上つたら全員が漁場を守りノリ漁業を発展させるために心を合せることを希望します。技術指導にあたる水試がこのようなことを言うのは少しおかしいようにも聞えますが、実はこれが水試として厚岸のノリ養殖を研究し、成功させるための基本方針です。「厚岸のノリ養殖は厚岸漁民の手で」と言ひ基本方針を漁協も普及所も水試も一体となつて守り、根室漁協や常呂ノリセンターの協力によつて、ここに至つたことを、これらの伴い手となる皆さんは十分に認識していただきたいと思ひます。

### 三、ワカメ養殖

四月はじめに各組合に集まつていたいで種苗配分割り当てを決め、根室漁協のほか新設の羅臼漁協採苗場からも種苗供給が実現しました。このためにまだ不十分ながらも、種苗供給が従来よりは円滑に行くものど、大いに

期待されました。しかし八月の種苗移殖直前に至つて、根室の早種に芽の大量脱落が起り配分計画に大幅な変更がでたために業者の皆さんに大変迷惑をお掛けしました。更にこれと前後して起つた津波によつて浜中町ビワセ地先の養殖筏のほとんど八〇%が大被害を受けてしまいました。過去にも大きな津波災害のあつた浜中町として、これからの養殖事業に対しても、改めて対策を講じなければならぬ課題が生じたわけですから。十二月中旬は、各地とも終漁期に入つていますが、このような事故に会つたにもかかわらず、各地とも予期以上の成果をあげたことは誠に喜ばしいことです。しかし、コンブ、ハリと同様、多くの反省すべき点が残されたことも事実です。(1)根室の早種(五月中旬採苗)の本養成期である八月上旬頃、毎年芽の脱落が見られることは、現在未だに解決できない重大な問題です。しかしこれをうまく乗り切ると早期出荷ができると言ひ利点もあつてなかなか中止できません。事実、浜中などでは根室よりも発生率は良いようで、管理技術の改良によつては、事業として安定できそうにも考えられます。しかし、現状では特に根室海峡や、湾内で水の交流があまりない所では大きな期待を掛けられず、いふに思ひますので、思い切つ

て早種利用を減らし、この分を中間種（五月末～六月初採苗）か遅種（六月中旬～下旬採苗）に切りかえるのが得策のように思います。

ただしこれによつて今まで通りの方法では全体の採苗計画が縮少されますので、新しい種苗管理の方法を考え出さなければならず、現在、水試と根室漁協でその方法を検討中です。また根室漁協でも、成績が向上してきた太平洋沿岸花咲地先での早種利用については、試験してみる余地が十分残されているように考えます。

(2) 浜中町はチリ地震、十勝沖地震などによる津波被害の例に見られるように、津波の起りやすい地形です。四十四年八月の津波は、根室・厚岸・釧路などでは、高潮程度の現象しかみられず、被害は全く起りませんでした。が、ピワセ地先だけは被害を受けただけです。しかし、その後、関係者から当時の模様を良く聞いてみると、災害はたしかに津波によるものですが、ある程度は人災による面もあつたように考えられます。すなわち漁場内に養殖筏を設置する時に、その配置や間隔に意を用いることは当然ですが、隣り合つた筏と十分に張り網をとつてお互に力の補強をし合うことにより、単独設置では得られない強い対波性を持つことができます。また多くの筏の中

で土台でも手を抜いたものがあつて、これが流されると、他の筏にも大きな被害を与えます。さらに、このような相互補強を行なうためには、筏の規模や規格などで、基本的な部分は、一定にしておくことなどが必要ですが、このような点に手抜きがなかつたかどうかを良く反省して、災害に備えると共に、漁場の有効利用を計ることが大切です。できることなら、ピワセ地先にも根室地先と同じように沖合保全施設の設置を検討すべきでしょう。

(3) 根室漁協の生産は約二十三トンに達し、道南よりはまだ少ないとは云え、三十七年来の最高を記録しました。浜中・厚岸などの生産も加えますと、毎日道内に出荷される量は年々多くなり、それにつれて市場価格も、従来のような高値ばかり夢見ていられなくなりま

す。特に水切り不足による傷みが一番市場関係者から指摘されてますので、この点については、漁協でも一層工夫し、指導されるよう希望します。

### 「質疑の中から」

道東地方で食用として漁獲されている主な「つぶ」は、俗称「まつぶ」、「うだいつぶ」、「毛つぶ」などがあります。

「毛つぶ」の由来は貝殻に剛毛が生えていることから、このほかに「辛つぶ」「煙草つぶ」などとも呼ばれるのも肉身に辛味がある故の俗称ですが加熱によつて硫化水素の不快感を発生し易いことも辛味、苦味とともに香味を低下させる要因となります。

これらを除くするには、先づ生の殻付きのうちに殻を割り、肉身中に入つている通称「あぶら」や内臓などを、きれいに取つた後、塩もみ（7%前後の食塩）を行い粘液物を水洗しながら除去してから煮熟（70℃で15分程度）すれば苦味や不快感は消失します。

尚、釧路で漁獲された「毛つぶ」の歩留をお知らせいたしますと次のようです。

七月初旬	20 / 21 %	九旬	17.0 / 18 %
八月初旬	16.5 / 18.5 %		

(加工部)